
記憶の断片

枚方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

記憶の断片

【Zコード】

N1122A

【作者名】

枚方

【あらすじ】

平和だった日常に、突然現れた黒の組織… そのターゲットは、元組織の一員である灰原哀だった！ その危機を救うため、コナンは組織と接触を試みるのだが… 事件は悲しい方向に進んでしまった。

春休み、まだ起きるには早い時間にコナンは目が覚めた。

カーテンを開けると、朝の柔らかい光が室内に明るく注ぎ込む。その光に、コナンは思わず目を覆つた。

窓を開けてみると、心地良い春風が吹いて来た。風が近くに生えている木々に当たる。

それに答えるように、木々がざわざわと音を立てて鳴いている。春の臭いがした。

「ん…、起きるか。」

コナンは枕元に置いてある眼鏡をかけると、扉を開け、部屋を後にした。

「おはよう、コナン君！ 今日は早いのね。」

朝の不快感を吹き飛ばしてくれる、蘭の挨拶。本当は、工藤新一として挨拶を交したいのだが、まだ時間がかかりそうだ。

「おはよう！ 蘭ねえちゃん。おじさんは？」

「まだ寝てるわよ。昨日遅くまで飲んでたみたいだったから…」

蘭は台所で何かを作っている様だ。香ばしい臭いが辺りに広がつて来る。

コナンはテーブルに座りながら、出来上がるのを待つていた。

「はい、朝御飯よ！」

「ありがとう、蘭ねえちゃん！」

蘭はテーブルに、トーストとコーヒーを運んで来てくれた。それを手に取る。温かい感触が皮膚を伝わって来た。

「いただきま～す！」

そう言つと、コナンは持つていたトーストに口をつけた。

パリッという音と共に、焼きたてのパンの味が口いっぱいに広がる。

「どう？ 美味しい？」

「もちろんだよ！蘭ねえちゃんは食べないの？」

「今作つてるから、もう少ししたらねー」

「そう言つと、蘭は再び台所に向かつてしまつた。

（やうだ、今日は九時から公園でサッカーをする約束だつたな…）
朝食を食べていたコナンは、急にサッカーの約束をしていた事を思い出した。

時刻は八時半にならうかという所だつた。

朝食を口に運ぶスピードも、自然と速くなる。

ほんの五・六分で、コナンは朝食を食べ終えた。

「」ちそうさまー」

その後、手早く歯磨きを済ませると、台所に立つてゐる蘭をよそに、

コナンは足早に一階へ上がつた。

今から全ての準備を整えなければならないので、少し焦つていたのだ。

部屋に戻るとコナンは素早く着替えを済ませ、恐らく今日使うであります、愛用のサッカーボールを探した。

いつもの置場所である、ベッドの下に手を伸ばす。

しかし、その手に触れる物は何も無く、伸ばした手は空を切つた。

「あれ？まさか…」

コナンはしゃがんでベッドの下を覗いてみたが、思つた通り何も無かつた。

「マジかよ、こんな時に限つて…」

立ち上がりて部屋を見回してみると、何処にも見当たらない。

「仕方ねえ、今日は手ぶらで行くか。」

そう決めたコナンは、足早に部屋を後にした。時刻は既に、八時四十分を回つていた。

一階に降りてきたコナンは、蘭に外出を伝えていない事を思い出した。黙つて行けば、後できついお仕置きをされる事をコナンは十分に知つている。

「蘭ねえちゃん。僕これから公園に行つて来るね！」

相変わらず台所で作業をしてゐる蘭に、コナンは少し離れた所から言つた。

少しでも時間を節約するための作戦だった。

「分かつたわ。気を付けてね！」

遠くの方から蘭の声が聞こえた。それを合図に、コナンは玄関に向かつ。

「じゃ、行つて来ます！」

コナンの声が、家の玄関に響いた。その音は反響し、蘭の耳にも届いた。

わつきよりも遠くの方から、いつてらつしゃいといつ声が聞こえた。
(さて、灰原はどうしてるかな。)

玄関の外に出て、軽く背伸びをしながら、コナンは思つた。
珍しい事に今日は、灰原も公園に行くと言つていたのだ。

すぐ隣の大きな家が、灰原と博士の家だ。

とても一人で住んでいるとは思えない程大きく、広い家である。
玄関の前に立ち、コナンは無氣力に叫んだ。

「灰原、来てやつたぞ。まだいるんだろ？」

しばらくして、玄関から一人の少女が出て來た。

赤みがかつた茶髪に、色白な肌を持つ不思議な少女。彼女が灰原
哀だ。

「別に良いわよ…、わざわざ迎えに来なくても。」

突き放すように言葉を言い放つ、それがいつも彼女である。

「んな事より、用意できたのか？」

構わず、コナンは話を切り出した。

灰原のペースに付き合つてゐると、日が暮れてしまつ。

「良いのかしら？そんな口を聞いても。」

「はあ…？」

コナンは最初、灰原が寝惚けているものだと思つていた。しかし、

それは違つた。

「これがどうなつても良いのかしら？」

と、灰原が持つていたのは、コナンが無くしたと思つていたサッカーボールだつた。

「あつ！お前、どうしてそれを？」

「あら、この前皆と遊んだ時に、貴方が公園に忘れて行つたのよ。」
そう言えば、この前遊んだ時、帰りにサッカーボールを持っていた記憶が無い。

「分かつたよ、俺が悪かつた！」

「泣いて謝つたら許してあげても良いわよ？」

微笑を浮かべながら、彼女は言った。

そのサッカーボールは、蘭に買つてもらつた物で、コナンにとつては凄く大切な物なのだ。

（くつそー、人の足元見やがつて…。）

本当に泣いてやろうかとコナンが考えていると、灰原は割り込む様に言った。

「何でね…。はい、返すわ。こんな所で泣かれたら困るもの。」

ポンと蹴り上げられたサッカーボールは、そのままコナンの足元に落下した。

「誰が泣くかよ、サッカーボールの為なんかに！」

からかわれて苛立つたからなのか、それとも照れ隠しから来るものなのか。

良く分からぬまま、コナンは声を張り上げていた。

「ふふ、それもそうね。じゃ行きましょー。」

そう言うと、二人は灰原の家を後にした。

（用意出来てんなら、早く出て来いよな…。）

コナンは思つた。心の中ではそつ思つていても、実際は嬉しい気持ちでいっぱいだつた。

なぜなら、彼女の笑つた顔を久しぶりに見る事が出来たからだ。

第一章・朝春の訪れ（後書き）

どうでしたか？何かほのぼのした話を書きたくなつて来ました…。初投稿なんで、多目に見てやつて下さい。これから暗い話になると思うと、参りますね。次回は公園にてお会いしましょう…それでは！

第一章：新たな鍵

外は快晴で、時折吹く温かい風が、一人に春の訪れを感じさせる。草木は生い茂り、街路の周りを隙間無く埋め尽していた。

その街路の真ん中を通りるようにして、一人は歩を進めている。

「それにしても、どうして今日は公園行く気になつたんだ？」

頭の後ろで両腕を組みながら歩いていたコナンは、ふいに訪ねる。

「あら、どうしてそんな事を聞くのかしら？」

灰原は、怪訝な顔をしてコナンの方を見る。

「いや、少し気になつたからさ。何か変わつた事あつたんじゃねえかつてな。」

少々困った表情で、コナンは答えた。

「でも、これを言つたら貴方はきっと驚くわよ……それでも良いの？」

頬に笑みを浮かべながら灰原は言った。

どんな話が飛び出すのか気が気で無かつたが、大体の予想は付いていた。

「それで……、その驚く話つてのは何だよ？」

話に興味を持ったコナンは、恐る恐る灰原に訪ねてみた。

「解毒剤、と言つたら驚くかしら？」

「げ、解毒剤だと！？」

自然と声が大きくなる。

毒薬を作つた本人からその話を聞くのだから、当然である。

「まさか、解毒剤が完成したのか？」

徐々に心臓の鼓動が速まつて来るのが自分でも分かつた。

解毒剤で元の体に戻つたら、すぐにでも蘭に報告したかった。

「いいえ、でも鍵は手に入れたわ。」

鍵は手に入れた。言葉の意味がいまいち分からぬコナンは、さら

に問いただす。

「鍵は手に入れた？どういう事だ？」

「つまり、あと少しで完成するって事よ。試作品ではない、本物の解毒剤がね。」

この言葉は、コナンの胸に深く届いた。
それと同時に、何としても彼女を守つて行こうといふ気持ちが、心の中に沸々と溢れて來た。

彼女を失えば、工藤新一の存在も消える…。

蘭の悲しむ顔は、もう一度と見たくなかった。

「灰原、ありがとう！感謝するぜ。」

コナンは、自然と真剣な口調になる。

こんな気持ちで心から礼を言つたのは、久し振りだった。

「お礼なら、工藤新一の姿に戻つてから…ね？」

コナンの真剣な表情に少し照れながらも、灰原は素直な気持ちを伝えた。

『昔の記憶はもう引きずるな』

この、優しくて温かいコナンの言葉…それが、彼女を変えていた。

「ああ、約束する！必ず守つてやつからな。」

同じ境遇を辿つた彼だからこそ分かり合える…

灰原は、APTX4869を飲んだ事を後悔してはいなかつた。

やがて、目的地である米花公園が見えて來た。

「おっ！三人共來てるみたいだぜ？」

公園を眺めながらコナンは言つた。

三人はブランコに並んで乗つており、退屈そうにして待つてゐる。

「あっ！コナン君と哀ちゃんが來たわよ！」

歩美が、ブランコに乗つてうなだれている光彦と元太に呼び掛ける。

その言葉に反応して、二人はほほ同時に顔を上げた。

「おう、コナン！灰原と一緒に？」

元太が大きな声を上げて話し掛けて來た。

ふくよかで背も高く、小学四年生と言つても十分に通用する体格の少年である。

「二人共おはようございます！元気でしたか？」

光彦が、元太に続いて話す。

母親の性格が遺伝しているのか、しつかりした言葉遣いをしている少年である。

「おはよう、コナン君！ 哀ちゃん！」

歩美が嬉しそうな顔をして喋っている。パチチリした瞳に、透き通った声をした女の子である。

「で、今日は何をするんだ？」

空いている「ブラン」に腰掛けながら、コナンは周りに訪ねる。それに合わせて、灰原もコナンの隣の「ブラン」に腰を掛けた。

「おいおい、何で隣に座んだよ？」

「仕方無いでしょ？ 他に空いてないんだから…」

少なからず、コナンは隣に座った灰原の存在を意識していた。その様子を見ていた歩美は、コナンの注意を引くために、わざと大きな声で話しかけ始めた。

「歩美、サツカーが良いなあ！ 皆はどう？」

この場合、コナンがその場を取り仕切る事になつていて

「サツカーはこの前しただろ？ 他で良いよな？」

歩美自身も、この前サツカーをした事は良く覚えていた。確実に断られるのも承知の上だ。

だが、歩美の作戦は無事に成功していたのだ。

今、コナンの興味は遊びに向かつていて、その事実だけで満足だった。

「じゃ、歩美ちゃんの意見を踏まえた上で… 鬼ごっこはどうだ？」

鬼ごっこなら、子供でも出来るだろ」とコナンは考えた。

「うん、鬼ごっこで良いわよね！ みんな？」

歩美とコナンの意見に反対する者はいなかつた。

正確には、コナンでは無く、歩美の意見に反対が出来ないのである。

「よし、じゃあさつと準備しようぜ！」

準備といっても、鬼を決めるだけの作業で時間はかからない。

五人はブランコから降りると、鬼を決める為、輪になる。

「せ～の！ ジャン、ケン、ポン！！」

結果は歩美、コナン、灰原が勝ち抜け。元太、光彦のどちらかが鬼をする事になった。

二人は、お互いの心を読む様に睨み合う。

五、六秒程の沈黙が流れた…。次の瞬間、二人は勝負に出た！

「せ～の！ 最初はグー、ジャンケンポン！！」

結果は、チョキを出した光彦の負けだった。

その瞬間、元太は拳を握り締め、勝ち誇った表情になっていた。

「鬼は光彦だぞ、みんな逃げろ～！」

元太の言葉を聞くと、あつと言つ間に四人は各所に散らばった。

光彦は、走つて逃げる四人をただ呆然と見つめていた。

「あつ～ずるいですよ、フライングなんて…。じゃあ、行きますよ！」

ふつと我に返ると、光彦はすぐに皆を追いかけて走り始めた。

しかし、その仕草に気付く者は無く、四人はダッシュで逃げ続けていた。

第一章・新たな鍵（後書き）

どうでしょ？これで一週間費やして書いたとバレたら、友人に放り投げられるでしょう…秘密にしておいて下さい。次はいよいよ驚きの展開が…？「ナンが組織に…おつと…この先はお楽しみで！…皆様の感想どんどん募集しています。それでは、さらば！」（作者逃走）

コナン達が公園に来てから、既に一時間が経過していた。
時刻は、午前十一時を回った所だ。

この時間になると、ここ米花公園は賑やかになつて来る。
子供連れの家族や、グループになつて遊んでいる子供達で公園は活
気付いている。

五人は、その様子をベンチに座つて離れた所から眺めていた。

「いけない！もうこんな時間‥。」

ふいに歩美が、驚いた様な顔で言った。

「どうした？歩美ちゃん。」

隣に座つていたコナンが歩美に問い合わせる。

他の三人も、その会話を黙つて聞いている。

「あのね、お母さんが門限は十一時まで言つてたの。『ごめんね！』

これを聞いて、ようやく元太が話し始めた。

「何だよ歩美、もう帰つちまうのか？」

露骨に嫌な顔をしている元太を見て、光彦が止めに入る。

「まあまあ元太君、歩美ちゃんには歩美ちゃんの都合という物があ
るんですから。」

元太は何かを言いたそうな顔をしていたが、光彦の言葉に渋々納得
したようだ。

「大丈夫よ！また明日遊ぼう！皆は遊べる？」

それに対し、今度は光彦が真つ先に答える。

「ええ、僕は大丈夫ですよ！元太君は予定あるんですか？」

「別に何もねえぞ。遊んでねえと毎日毎日暇で死にそだからぞ‥。」

「溜め息混じりに元太は言った。

二人は暇であると感じた歩美は、コナンと灰原に聞いてみる事にし
た。

「ねえ、コナン君と哀ちゃんは明日遊べる?」

歩美が淋しそうな顔をして一人に訪ねる。

コナンと灰原は、歩美の思つてゐる事を即座に感じ取つた。

彼女の不安そうな顔を見れば、その様子がはつきり分かる。

「ああ、約束する。また明日来てやるぜ! なつ、灰原?」

「ええ、もちろんよ。だからそんな淋しそうな顔しなくても良いのよ?」

灰原の優しい言葉に、歩美はいつもの笑顔に戻つていた。

「うん! ありがとう! 哀ちゃん、コナン君!」

嬉しそうに返事をすると、歩美はベンチから立ち上がり、急いで公園の出口に向かつた。

「みんな~! また明日会おうね!」

歩美は途中で後ろを振り返ると、大きく手を振りながら挨拶をして、帰つて行つた。

歩美の帰りを見送つた四人は、この後どうするかについて話し合う事にした。

「さて、どうする? 僕達も家に帰るか?」

「コナンは、ベンチから静かに立ち上がると、周りに訪ねた。

「そうだな。俺、母ちゃんの手伝いしなきゃなんないし……。」

「僕も午後から塾があるので……、お先に失礼しますね。」

どうやら一人とも、午後から予定がある事を隠していた様だった。

「じゃあな光彦、元太! 時間は、また明日連絡すっからよ。」

コナンから連絡を受ける事を聞いて、光彦と元太はほぼ同時にベンチから立ち上がる。

「じゃあな、コナン! 明日遅刻すんなよ!」

「二人とも、また明日会いましょう。」

そう言つと、二人は公園の出口に向かつて走つて行つた。

コナンと灰原は、二人が公園を出て行く姿を静かに見送つた。

「さて、それじゃあ俺達も帰るか?」

軽く背伸びをしながらコナンは言つた。

「ええ、もうここに用は無いわね。」

灰原は、ゆっくり立ち上ると、コナンを連れて米花公園を後にした。

帰り道の町並みは、一人が朝に通つた時と少しだけ違つていた。

「それにしても、随分人通りが減つたんじゃないかしら？」

辺りを見回しながら、灰原は言った。

「ああ、この辺りは交通の関係で昼になると人通りが減るんだよ。知らなかつたのか？」

コナンは何気無く言つたのだが、段々灰原が可哀想に思えて来ていた。

（悪い…、少し無神経な事言つちまつたな。）

口に出しては、とてもでは無いが言えなかつた。

いくら解毒剤を作る為とはいえ、近所の様子すら把握していない…。

それに比べて、自分はのんびり完成を待つだけ。

いざと言つ時、守つてやる事しか出来ない…。

「ええ、でも私は外に出なくとも平氣よ。貴方が小さくなつたのは私の責任もあるんだし…」

灰原は、こんな目に合つても自分のために必死になつてくれている。こんな小さな体で、頑張つている。

これまでの自分と、一体何が違うだらうか？

同じ毒薬を飲み、同じ組織に追われ、一人で必死に戦つて來た…。今考えれば、薬を作つたかどうかの違いだけ。

そんな自分に、やり場の無い苛立ちが生まれる。

「悪い、今まで気付いてやれなくて…。」

「ねえ、ちょっと…どうしたの？」

灰原は、心配そうな顔をして見ている。

「お前が、こんなに頑張つてたなんてな…」

「そんな事…、別に良いわよ。気にしないで。」

柔らかい笑みを浮かべながら灰原は言った。

「こうして貴方と一緒にいられる…、それだけで十分よ。」

普段は闇に隠れて見えないが、灰原はとても優しい心を持っていた。

「ナン自身、こんなに優しい灰原を見たのは初めてだつた。

（灰原…、それが本当のお前だな。）

皆に冷たく接していたのも、心配をかけまいとしていたからだつたと、「ナンは悟つた。

やがて、博士の家が見えて来たのだが、いつもと様子が違つていた。

「お…、おい灰原、あれ見ろよ…。」

コナンは、その異様な光景に素早く気付いた。

家の玄関の前に、見知らぬ黒い車が停まつていてるのが目に入つた。

その光景に、「ナンは思わず言葉を濁す。

「えつ…？」

そして、灰原もその異変に気付いた。

黒い衣を身に纏つた人間が、博士の家の玄関にいたのだ。

「まさか…ね…？」

灰原の脳裏に、最悪の考えが浮かんでいた。

第三章・組織との接近（後書き）

いかがでしたか？果たしてこの先一人はどうなってしまうんだ！と
気になる人も希にいるでしょう。しかしタイトルが「組織との接近」
ということは……推理しよう。感想どんどん募集中です！次回は、
ついに黒の組織と接触しますよーお楽しみにー（作者逃走）

第四章・接觸。そして運命は…

コナンは灰原の手を引くと、近くの物陰に素早く身を潜めた。

灰原も、この只ならぬ雰囲気に少なからず困惑している様子だった。

「ねえ、江戸川君…」

灰原が小さな声で訪ねて來た。

「ああ…、まずい事になつたな」

次第に心臓の鼓動が高鳴つて来る。

なぜ組織の手がここまで及んで來たのか、全く分からなかつた。この状況から分かることは、博士の家に組織の一員がいる事。

そして、博士が人質に取られている事だけだ。

玄関に怪しい人物がいるのに、博士が警察に通報しないわけが無い。博士が人質に取られていると考えれば、皮肉にも全てのつじつまが合ひ。

「博士…」

灰原は、今にも消えてしまいそうな声だつた。

灰原にとつて、博士の存在は余程大きくなつていたのだろう。もしかすると、博士の事を本当の家族の様に思つていたのかもしれない。

「灰原…心配すんな！俺に任せろ。」

その様子を見ていたコナンは、静かに呟いた。

こんなに悲しそうな表情の灰原を、これ以上見ていられなかつた。

「えつ…？」

灰原は、下げていた頭を上げると真っ直ぐコナンの方を見た。お互いの目線が、ぴつたり合ひ。

それを見て、恥ずかしさからかコナンはさつと顔をそらす。

そして、目線を合わせない様に下を向きながらこう言つた。

「俺が、奴と接觸するんだよ。」

コナンは、何の躊躇もせずに言い放つ。

心配そうな表情の灰原を見て、更にコナンは言葉を続けた。

「大丈夫！必ず戻つて来つから心配すんな。」

灰原には、コナンが何をしようとしているのか直ぐに分かつた。

そう…、自分を犠牲にして博士を救おうとしているのだ。

警察を介入出来ないこの状況では、そうせざるを得なかつた。

「あなた…、死ぬかもしれないのよ？なのに…どうして…」

灰原は、もうコナンに何を言つても無駄だという事を悟つた。

何故、他人を守るため自分の身を投げ出すような真似が出来るのか。

「何言つてんだよ。約束したろ？お前を必ず守つてやるつてな！」

その答えは、今のコナンの言葉を聞いてすぐに分かつた。

彼は、他人の事を一番に考える事の出来る人なんだと知つた。

その優しさは、今の灰原に欠けている物だつたのかもしれない。

「…絶対、戻つて来てくれるわよね…？」

今にも泣き出してしまいそうな感情を、必死に押さえて言つた。

「ああ、必ず戻る！」

それは周囲に聞こえない程の小さな声だつたが、灰原の心にはとても大きく響いた。

「俺は、奴らを家の中から誘い出して、出来るだけ遠くに行く。お前はここで様子を見る。」

コナンは、口を休める事無く次々と言葉を発して行つた。

その表情には、もう迷いは無かつた。

「じゃあな…灰原。」

そして、コナンは物陰から身を出し、ゆっくりと男の元に向かつて歩いて行つた。

灰原は、コナンの後ろ姿をとても悲しそうな表情で見守つていた。

そう、コナンが無事に戻つて来てくれる事だけを信じて…。

「江戸川君…大丈夫。私が何とかするから…。」

コナンの背中を見ながらそつと呟く。

これが、本当に精一杯の言葉だった。

一方コナンは、もうすぐ博士の家の前に辿り着く所である。

玄関の前には、一人の男が何かを待っている様に立っていた。側には、一台の黒い車が停めてあった。

「ねえ、おじさん。ここで何してるの？」

コナンは男にゆっくり近付くと、なるべく怪しまれない様に話し掛けた。

「何、だお前は、ここから消える！」

目深に被られた帽子で顔ははつきりしないが、男は黒の組織の特徴を良く捕えていた。

「僕、博士に用事頼まれてるんだ！ ねえ、中に入れてよ！」

コナンは男に探しを入れる為、言葉を続けた。

「博士だと…？あのジジイについて何か知っているみたいだな。」

男は、コナンを睨むと冷たく言い放った。

本当に冷たく、殺氣に満ちた目であった。

（こいつ…、博士の命を盾に俺を誘拐するつもりだな？）

コナンはそう推理したのだが、この状況を覆す策が見つからなかつた。

本来なら警察に連絡するのだが、博士が人質に取られている今の状況では到底無理だ。

この麻酔銃とシューズを使っても相手は複数・目的の為なら博士をも殺しかねない。

それに、この男が仲間と常に通信しているかもしない。

博士に危険が迫っている以上、男の指示に従うしか無かつた。

「全く…、馬鹿なジジイだぜ。さっさと吐けばこのガキを誘拐せずに済んだものかな…」

男はコナンの方を見ながら嘲笑う様に言った。

「何だと…てめえ、博士に何をしたんだ！」

コナンは恐ろしい程の形相で男を睨み付けた。

その表情は江戸川コナンでは無く、工藤新一そのものだった。

「ふん、お前に教える必要は無い…秘密を知られたからには、一緒に来てもうう！」

男はコナンの迫力に動じる事無く、淡々と話を続けた。

『秘密を知った者は、誰であろうと抹殺する』

これが、闇に生きる黒の組織の掟だった。

「分かつた…その代わりに博士を解放しろ。」

コナンは冷静さを取り戻すと、男が出した条件に素直に従つた。

いや、そうせざるを得なかつたのである。

「ふん…良いだろ。だがな…」

そう言つと、男はポケットから薬品の染み込んだガーゼを出した。

「お前には、しばらく眠つていてもらひ。」

そして、コナンの口に素早くガーゼを当てる。

「うつ…何を…」

為す術も無く、コナンは地面に倒れ込んだ。

男は、動かなくなつたコナンを抱え上げると、側にある車に乗つた。

それに合わせて、博士の家からも一人の人間が出て來た。

上から下まで、黒一色の服を着ている男達だ。

そして、二人の男も別の車に乗り込み、阿笠宅を出でいった。

一台の車は家からどんどん遠ざかり、やがて見えなくなつた。

そう、一人の高校生探偵と共に…。

第四章・接觸 そして運命は…（後書き）

いや、投稿が遅い…何かと忙しくて…あの、すいません…さて、一言謝った後にまた話題を一つ。これを書くに当たつて一番困ったのは、男とコナンのやりとりなんですね！…だってさ、矛盾が出ない様にするの大変だったんよ？しかも一時間かけた癖に、全然面白くねえし…はあ、もつと上手くなりたい。灰原の会話も何かしつくり来ないなあ！とにかく、次は灰原の行動がメイン（それしか無い）になっちゃいます。博士は無事なのか？男の正体は何なのか？そしてコナンの運命は？？などの様々な疑問がありますね。続きは次回以降を見て下せえ！それじゃ、またいつか！

第五章・全てを伝える時

コナンが連れ去られる少し前、灰原は忠告を無視して家の裏口に回り込んでいた。

博士の無事さえ確保すれば、コナンが組織に捕まる心配も無くなる。コナンの頼みでも、自分だけ安全な場所で見ている事は出来なかつた。

「ijiからなら、何とか入れそうね…。」

一ヶ所だけ低くなつていた家の塀を乗り越え、裏口に回り込む。そつと扉に耳を当て、室内の様子を確認した。

「兄貴、あのジジイどうするんですかい？」

「バラすのは、シェリーを捕まえてからだ。」

中から、聞き覚えのある男達の声が聞こえた。血も涙も無い、冷酷な悪魔の声だつた。

（ジン！ウォッカ！）

灰原は思わずドアから耳を離した。

しかし、その話し声は薄い壁を通り抜け外まで漏れて来てしまう。

「でも、何で分かつたんですかい？ここにシェリーがいるって…」

「なあに、俺はあいつの小さい頃の顔を知つてゐるからな…町で見かけた時に尾行しただけだ。」

その瞬間、灰原は激しく悔んだ。

自分のせいで博士がこんなにも危険な目に合つてゐる事を。

そして…、奴らは自分を殺す為に待つてゐる事も分かつた。

「さすが兄貴…、でもその時拐えれば良かつたんじゃねえんですかい？」

「ふつ…、あの時は他の子供達と一緒に歩いていたんでな…合図

だ、ウォッカ行くぞ。」

そして、ジンとウォッカが扉を開けて外に出て行く音が聞こえた。乱暴に扉を閉める音、重複する車のエンジン音が静けさを保つてい

る灰原の耳に届く。

（えつ…？ 狹いは私のはずなのに、なぜ奴らは外に出たの？）

灰原には、コナンが何か行動を起こしたとしか思えなかつた。

（今ならまだ間に合うかもしけないわ！ 私が犠牲になれば…）

直感的にそう思い、急いであの車が停まつていた方向へ向かつた。

しかし、車は既に遠く離れた後であつた。

（まさか…、江戸川君もあの中に！？）

しかし、他に思い当たる節は無かつた。

コナンの姿はどこにも無く、灰原は一人ポツンと立ち尽くしている状態である。

そう…、灰原が見たこの光景こそ、コナンが車で連れ去られた瞬間だったのである。

「はつ…！ 博士は？」

灰原はようやく博士の事を思い出した。

コナンを助ける事ばかりでは無く、博士の無事も同時に確認しなければならない。

今起きている事の重大さに気付くと、灰原は急いで家のの中に入つた。室内は荒らされた形跡も無く、ついさっきまで普通に生活していたかの様だつた。

「博士ー！ お願い、返事をして…！」

灰原は今までに無い程の大声で叫んだが、博士からの返事は無かつた。

「…もしかして二階かもしれないわ！」

突然の出来事で気が動転していだが、博士の部屋は二階だ。

もし突然奴らが押し入つて來たなら、当然二階にいた時に襲われたはず。

そんな簡単な事に気付かない程に、灰原の心は不安定だつた。

「でも…、やつぱり信じられないわ。江戸川君が拐われたなんて…」

階段を登りながら、ぽつりと呟く。

今までどんな事件も解決して來たコナンが、突然遠くに行つたなん

て信じられなかつた。

（博士… お願い、無事でいて。）

こうしている間にも、コナンがどんどん危険に晒されている。一刻も早く、博士の無事を確認して助けを求めたかった。

「博士、中にあるの？ 入るわよ！」

灰原は殆んど確認もせずに中へ入つた。

そこで見たのは、仰向けにベッドで寝ている博士の姿だつた。 我を忘れ、一気に博士の元へ歩み寄る。

「はつ… 博士？ ねえ、目を開けて！」

灰原は、博士の大きな体を力一杯揺さぶつた。

しかし、小さな子供の力で大人の体を動かせるはずも無かつた。

「くつ…、博士…！」

灰原は、限界まで大きな声を張り上げ、必死に呼び掛けた。

「んつ…、ここは…」

灰原の必死な呼び掛けに答えるかの様に、博士は目を覚ました。

「博士！ 大丈夫なの？」

灰原は、少しほつとした顔に戻つた後、静かに訪ねた。

「おお、哀君！ どうしたんじゃ？」

博士は、怪訝な顔で灰原を見た。

「何のんきな事言つてるのよ！ さつきまでジンとウォッカに拘束されてたのに覚えて無いの！？」

灰原は再び声を荒げて博士に詰め寄つた。

「またまた…、第一こんな所に組織が来るわけないじゃろ？」

灰原の必死な表情にも関わらず、博士はまだ半信半疑な様子だつた。

「だったら、江戸川君がいなくなつたのはどう説明するのよ！？」

灰原は更に声を大きくして言つた。

コナンが拐われた事のショックで、いつもの冷静さを失つてしまつたのだ。

「ごめんなさい…、でも本当の事なの。」

灰原は、博士の事も考えずに声を荒げてしまつた事を素直に詫びた。

「わしの方こそ……信じなくて悪かつたよ。それよりもっと詳しく教えてくれんか?」

そして灰原は、今まで起きた出来事を包み隠さず全て伝えた。

過去に尾行されていたせいで家がばれた事。

コナンが組織の奴らに拐われた事。

組織の目的が自分を殺す為だった事など、全てを話した。

「どう……、信じられなくともこれが真実なの。」

それだけ言うと、灰原は窓から外を見た。

雲一つ無く、本当に綺麗な空であった。

「まさか、本当に新一君が……?」

博士も、今起きている事の重大さに驚いている様子だった。

「そうよ……。でも不思議ね……どうして博士は何も覚えて無いの?」

灰原は、部屋に目線を戻すと博士に訪ねた。

「それが……、何故か事件があつた時の記憶だけ思い出せんのじゃ……」

どうやら、事件前後の記憶だけが綺麗に抜けているらしい。

「組織は何を考えているのかしら……?とにかく、一刻も早く警察に連絡しましょう!」

そう言つと、灰原は部屋の机から素早く携帯電話を持つて來た。

「ありがとう、哀君。」

灰原から受話器を受け取ると、博士はゆっくり間違えない様に、電話番号を入力した。

番号を押し終え、無機質な呼び出し音が電話口から響く。

「はい、こちら警察ですが。」

電話に出たのは、幸運にも田畠警部だった。

「あ、阿笠です。実は大変な事になりました……」

そして博士は、今回起こつた事件を伝えた。

コナンが見知らぬ男に誘拐された事。

家の中で、仲間の男達に監禁されていた事。

しかし、それが組織の仕業である事や、灰原を殺すのが目的であった事は当然言わなかった。

しかし、コナンを助ける為には、いずれ言ひ事になるかもしない。
運命の歯車は、刻一刻と動き始めていた…。

第五章・全てを伝える時（後書き）

終わった——五章も無事に出来た……。まさかここまで続くなんて思
わなかつたよ（おい！）家にいたのはジンとウォツカだつた……しか
も博士は事件の記憶が全く無い。これも計算の内だ（本当か？）次
回はどうしようか、まだ考へてない。多分警察が……つと、ネタバレ
になるから秘密！果たしてコナンは無事に戻つて来るのか？そして、
組織の本当の目的とは？気になる方は次回を見なさい。それじゃ、
ここまで読んでくれてありがとうございました！また、いつの日か。
(多分一週間以内)

第六章・事件を知つた二人の行動。

博士は、ついに事件の事を警察に言つた。

多少偽りもあるが、それは危険を避ける為に仕方の無い事である。そして、事件の概要を聞いた日暮警部は、静かに口を開いた。

「阿笠さん、とにかく落ち着いて下さい。…毛利君は、まだ事件の事を知らないのですね？」

日暮警部は、少し考へた後、なるべく冷静を装い博士に訪ねた。

「ええ…恐らく、知らんでしょう…。」

博士は、うつ向きながら小さな声で呟いた。

「そうですか…では、私と毛利君の一人で、今から阿笠さんの家へ向かいます。」

日暮警部は、さつきよりも自信に満ちた声で説明をした。

「すいません…、何から何まで警部に任せてしまいまして…」

「阿笠さん、何を言つてるんですか？あなた達民間人の不安、悩みを解決する事が我々警察の仕事なんですよ。」

日暮警部は、博士の言葉を遮る様にして言つた。

周りから見れば冷たく聞こえるかもしねないが、日暮警部なりの励ましの方法だった。

「分かりました。ありがとうございます！」

それでも、日暮警部の無器用さを知つていた博士には、その暖かい言葉がしつかり届いていた。

「いいえ、それでは失礼しますよ。」

そして、日暮警部との連絡は途絶えた。

電話口からは、規則的に続く電子音が聞こえて来ている。

それを確認し、阿笠博士もゆっくりと終話ボタンを押した。

「ねえ、日暮警部は何て言つてたの？」

博士の後ろから、心配そうな顔をした灰原が声を掛けた。

「おお！今から来るそうじやよ。心配するなど言つておつたぞ。」

博士は、灰原を元氣付ける為に出来るだけ明るく話し掛けた。

「そう、とりあえず安心出来るわね…。」

しかし、その言葉とは裏腹に、灰原の表情には元氣が無かった。

「どうしたんじゃ？そんな浮かない顔して…。」

博士は、俯いている灰原を見て心配になり、思わずしゃがんで訪ねた。

「…いえ、江戸川君が心配だつたから。」

そう言つと、灰原は振り返つて窓の外を向いた。

「でも、落ち込んでばかりはいられないわね…ごめんなさい。」

震えた声で、必死に泣きたいのを堪えている様子が博士には分かつた。

「謝らなくともいいんじゃよ。なに、新一の事だからもう脱出してるかもしれんしのう。」

博士の言葉にも、灰原は反応を示さなかつた。ただ物憂げに、窓から通りを見下ろしていた。

「ねえ…、博士。」

沈黙が少し続いた後、灰原は静かに口を開いた。

「んつ、どうしたんじゃ哀君？」

博士は、驚いた様子で灰原の方を見た。

灰原は、そつと部屋に目線を戻すと、博士の目を見ながら「いつ言つた。

「もし必要なら、組織の事や薬の事…。それに私達の正体を、警察に話しても良い？」

今の状態では、あまりにも警察に伝える情報が少なすぎるので、

ここで警察に組織の情報を話せば、警視庁一丸となつて捜査をしてくれる事は間違ひ無い。

だが、組織の事や薬の事を漏らせば、蘭や服部にも危害が及ぶ。

二人に取つては、正に苦渋の選択だつた。

「…仕方無いのつ。ただし、警察には哀君の口から言つんじゃぞ。」

「ええ。」

灰原の表情は、いつものポーカーフェイスに戻っていた。

それから一人は、口を固く閉ざしたまま、一言も喋らなかつた。

部屋には、時を刻む針の音だけが流れている。

一分が一時間にも感じられる程の、長い長い沈黙が流れた。

(ピンポーン!)

次の瞬間、いきなり玄関の呼び鈴が鳴つた。

それに驚き、博士と灰原は顔を見合わせる。

「あら、田暮警部の登場みたいよ?」

「そうじゃな。一階に行かねばならんのう。」

一人は、ほぼ同時に歩き出すと、一階の部屋を後にした。

(ピンポーン!)

一階への階段を降りている途中で、再び玄関の呼び鈴が鳴つた。

「田暮ですが、中にはいますでしょうか?」

それは、紛れも無く田暮警部の声だった。

博士は素早く扉の前に駆け寄り、しつかりとノブに手を掛けた。ギィィィ、という音と共に扉がゆっくり開く。

「おお、田暮警部。待つてましたよ!」

玄関先には、連絡を受けていた田暮警部と、事件の当事者である毛利小五郎が立つていた。

「阿笠さん!コナンが拐われたというのは本当なんですか!?」

そう言つうと、小五郎はいきなり博士の肩に掴み掛かった。

「ほ、本当じゃよ!紛れも無い事実で!」

博士は、一瞬その突飛な行動に驚いたが、抵抗する事は無かつた。

「あんたがいながら...コナンはもう戻らないかもしれないんだぞ!?

？」

小五郎は、更に力を込めて博士の肩を掴んだ。

「し、仕方無いじゃないか...何も出来なかつたんじゃから...。」

小五郎の尋常では無い様子を前に、博士は弱々しい口調で答えた。

「何も出来ないって...てめえ!そんな言い訳で許すと思つてんのか

!」

小五郎は、拳を振り上げ今にも博士を殴り飛ばしそうな剣幕だった。

「毛利君……辛いのは分かるが、やめるんだ…」

田暮警部は、喉から絞り出す様な声で小五郎を止めに入る。

「しかし、警部殿…」

まだ肩を掴みながら、小五郎は田線を田暮警部の方に移す。

「…」で阿笠さんを殴つても、何の解決にもならないんだ。その事を良く考えてみろ…。」

そう話す田暮警部の表情には、普段見せない様な気迫が漂つっていた。

「…警部、阿笠さん…さつきはどうもすいませんでした。」

小五郎は博士の肩から手を放すと、深く頭を下げて謝つた。

「毛利さん…別に良いですよ。さあ、早く中に入つて下さい。」

そう言つと、博士は一人を室内に招き入れた。

そのまま部屋の中心にあるソファーに、二人は深く腰を掛ける。

「さて…毛利君に確認させる意味も込めて、もう一度詳しく述べ事件の事を話してくれますかな?」

小さな溜め息を一つ付いた後、田暮警部は静かに言った。

「はい。」

そして、博士は慎重に言葉を選びながら、再び事件の事を話し始めた。

第六章・事件を知つた二人の行動（後書き）

毛利さん…殴つちゃいかんよつー博士だつて辛いんだつてば。でも、さすが目暮警部！持ち前の迫力で止めちゃつた（何で解説してんだ？）何か、前回に比べてあんま話が進んで無いような、そんな気がする…。文章力が、まだ無いいつつのー大体第一章の話が一番面白いじゃないか！（自分的に）段々フレッシュな話が消えて来たね。こんな作者ですが、次回もどうぞ見て下さいまし。それではさよなら！

第七章・それぞれの動き

博士は、氣を使いながら一人より少し遅れて椅子に座る。そして、事件の経緯を二人に話し始めた。

「実は、私が二階で過ごしていると、突然一人組の男が入つて来て、変な薬を嗅がされ氣絶してしまったんです。」

二人は、ぐぐつと身を乗り出して博士の話を聞いている。

「そして、ふと氣が付いた時は、ここにいる哀君に起こされていた。というわけじゃよ…」

それを聞き終えると、今度は日暮警部が質問を投げ掛けた。

「では、君はコナン君がどうしていなくなつたか知つていてるかね？」

軽く咳払いをすると、日暮警部は言った。

「ええ…博士、本当に良いのよね？」

それに答える様に、博士は小さく頷く。

口元をぎゅっと噛み締めた後、灰原は核心となる部分を話し始めた。

「日暮警部、実は今回の事件…黒の組織と言つ奴らの仕業なんです。」

ついに、灰原の口から黒の組織と言つ言葉が飛び出した。

重苦しい空気が、辺りを包み込む。

「なぜ、子供の君がそんな事を…。組織とは、一体何なんだね？」

沈黙の中、日暮警部は一人言葉を返す。

「私も詳しくは知らないけど…、ある薬を研究しているらしいの。」

灰原の嘘とも思えぬその表情に、三人は言葉が見付からなかつた。

「それで…君は、その組織と少なからず関係があるのかね？」

日暮警部は、恐る恐る灰原に訪ねた。

「まだ分からぬ？私も組織の元で薬の研究をしていたのよ。」

灰原の、酷く冷たい表情に日暮警部は暫く困惑していた。

「私より、阿笠博士に説明してもらつた方が断然早いわ。」

二人は、そつと阿笠博士に目線を戻す。

「哀君の言った事は全て本当です、どうか信じてもらえませんか?」毅然とした態度で、博士は強く言った。

普段とは、全く違う真剣な口つきである。

「田暮警部…、探偵の私でも黒の組織なんて知らないですよ?」

小五郎は、小さな声で田暮警部に問い合わせる。

「いや、どうも私には嘘を付いているようには見えないのだ…警部の勘というものだな。」

その言葉に、小五郎はしばらく考へる様な素振りを見せる。確かに、ここで嘘を付いても灰原や博士には何の得も無い。現に、コナンは組織の手によって消えている。

それに、この一人が嘘を付くはずが無い。

田暮警部は、そう考えた上で嘘では無いと見抜いたのだ。

「確かにそうです、分かりました。お一人の言葉を信じましょう!」

小五郎は、何かを決めた様な表情で言った。

「私も信じてますぞ、阿笠さん!」

田暮警部が、少し遅れて言葉を放つ。

今、四人の気持ちがようやく一つになった。

「その言葉は…私じゃなく、富野君にお願い出来ますか?」

博士は、一ヶ所だけ訂正を加えた。

富野、と言う言葉に、二人は少しの間だけ困惑していた。この部屋でそれに当てはまる人物は、たつた一人しかいない。

「そう…私の本名は、富野志保よ。」

三人が見つめる中、灰原は静かにその言葉を切り出した。

既に小学生の雰囲気は消え、大人っぽさが全面に現れている。

「君は、志保…さんと言うのかね?じゃあ、灰原というのは…」

「偽名よ。博士に助けてもらえたかったら…私は組織によつて消されていたでしょうね。」

ふつ、と自嘲するかの様に灰原は言う。

「それで君は、阿笠さんの所で灰原哀と名乗りながら、生活してい

たというわけか…」

改めて、これが疑いよう無い真実だと、警部は納得していた。

「まあ、そんな所よ。信じてくれたかしら?」

安堵からか、灰原はふっと笑みを浮かべる。

「ああ!もう疑う余地は無い。組織壊滅に協力してやるぞ!」右手を前に差し出しながら、日暮警部は自信に満ちた声で言った。無言のまま、灰原はその大きな手を握る。

「ほら、毛利君も早くしないか!」

日暮警部は、呆然と見ている小五郎を急かす。

「あつ、いや、一緒に頑張りましょう!」

少し慌てた後に、小五郎はいつになく真面目な顔で言った。

「はい!どうもありがとうございます!」

阿笠博士は、笑顔で握手を交わした。

「では、私達警察はコナン君を探す。もちろん毛利君も一緒にな。日暮警部は、これから行動について簡単な説明をしている。

もちろん、四人が協力して考えたのだから、誰も反対者はいない。それぞれが、重要な仕事を任せていた。

「阿笠さんと、それに志保さん…は、また危険な目に合わない為にも、コナン君の帰りを待つていてあげて下さい。」

二人は、再度納得するように小さく頷いた。

「では…私達はこれで失礼します。後はお任せ下さい。」

「何かあつたら、いつでも連絡を!」

二人は、軽く挨拶をするとそのまま阿笠宅を出て行つた。

灰原と博士は、二人の立ち去る姿を玄関口から静かに見送つた。

「博士…、これで良かつたのよね。」

「おそらく、これで良いんじゃよ。」

二人の疲労は、既に頂点へと達していた。

明らかに元気が無くなっている様子が、互いにはつきりと分かる。

（本当に、これで良かつたの？）

疲れていて、何も考えたくないはずだった。

しかし、灰原は様々な考えを巡らせる。

自分でだけの力で、何とか出来たんじゃないかと思つた。

もしかしたら、悪い夢を見ているんじゃないかとも思つた。

しかし、それはあまりにも儂い考え方。

組織という名の、大きな城壁の前では、灰原の苦悩など無意味だつた。

「今日は、もう夜になつたみたいじゃし… そろそろ寝ようか？」
いつの間にか、時刻は九時を過ぎている。

「そうね…、何だか今日は疲れたわ。」

灰原も時計を見て、ようやく夜になつてている事に気が付く。
夕御飯も食べずに、一人はそれぞれ寝る為の身支度を始めた。
(明日から、本当の戦いが始まるのね…。)

コナンは、結局夜になつても帰らないまま。

灰原は、改めて置かれていた事態を深刻に受け止める事となつた。
やがて二人は、それぞれの思いを馳せながら眠りに付いた。
長い夜は、いつもと変わらない夜明けに移り行く事だらつ…。

第七章・それぞれの動き（後書き）

後書きとこ「づ」を借りて謝ります…全然面白くなくてすんませんつ！たぶん次話あたりから展開するのかなーと…曖昧に考えたり。ついに警察に伝えちまつたね、しかし簡単に信じ過ぎだよな？なんて疑問はどつかに捨てて下さい！日暮警部が博士をよっぽど信頼してるつて事に…さて、無理に次話の予告をするなら『葛藤』かな？誰の葛藤なのかはよく読めば分かるはず…それじゃー感想募集中ですな。

“コナン君！お願いだから目を開けて！”

蘭は、泣きながら必死にコナンの名を叫ぶ。

“残念ですが、運ばれた時には、もう…”

蘭の隣で、医者が顔をしかめながら言つた。

コナンの体には脈を計る為の心電計が付けられていたが、医者はゆっくりとそれを剥がす。

コナンの顔は青白く変色しており、完全に血の気が引いていた。

“コナン！死ぬなんてらしくねえぞ！”

“コナン君が死んでしまつたら、少年探偵団はどうなるんですか！”

“そうだよ！お願いだから目を開けてっ！”

元太、光彦、歩美らが必死で呼び掛けたにも関わらず、コナンが反応する事は一度と無かつた。

“江戸川君…嘘よ、冗談でしょ？あなたが死ぬなんて事…”

灰原はその様子を直視出来ずに、ただ呆然と立ち尽くしている。

こんなに悲しいのに、涙も出なかつた。

灰原には、コナンがベッドから起きて、また得意の推理を披露してくれる気がしていた。

しかし、それは絶対に叶わない事である。

何故なら、コナンは死んでしまつたから。

あの日の夜、警察から連絡があつた。

内容は、捜索の甲斐あつて、コナンを見つけたというものだつた。

勿論、灰原も博士も心の底から喜んだ。

“それが…瀕死の重症を負つていまして、助かるかどうか…”

しかし、喜びを遮つて出されたその言葉は、一人に取つてあまりにも残酷だつた。

その後すぐに指定された病院に来てみたが、既に遅かつた。

そう、既にコナンは亡くなつていたのだ。

ベッドの周りは、コナンの死を悲しむ人々でいっぱいだった。

平次、蘭、小五郎、少年探偵団と…本当に沢山の人が集まっている。

そんな中、灰原だけはコナンの顔をまともに見れなかつた。

ただ部屋の隅で、訳も無く立ち尽くしている。

（…どうやら、私の役目は終わったみたいね…）

まるで、魂の抜けた人形の様だつた。

『…君、…哀君！』

その時、突然誰かの声が灰原の耳に届いた。

脳へ直接語り掛けて来るような声が、どこからか響いて来る。

（誰！？一体どこにいるの？頭が痛い…）

我慢出来ずに、その場へ座り込んでしまう。

そして、徐々に視界が閉ざされて行つた。

「哀君！しつかりするんじや！哀君！…」

同じ人物の声が、さつきより大きく聞こえた。
(えつ……?)

灰原は、まだ状況が理解出来ずにいる。

ゆっくり目を開くと、側には必死な顔をした阿笠博士が立つていて。

「哀君！？どうしたんじや一体…」

博士は、とても驚いた様子で灰原に訪ねる。

「博士…、どうしてここにいるの？」

ベッドから急いで起き上ると、灰原は怪訝な顔をして言つた。

「ここは病院でしょ？それに、たつた今…」

灰原には、何が何だか分からなかつた。

一瞬で、病院から見知らぬ部屋に移動してしまつたのだ。

「何を言つんじや。ここはワシの家じやぞ？」

その言葉に、灰原は慌てて室内を見渡す。

確かに、ここは紛れも無く博士の家だつた。

昨日のまま、部屋の風景は変わつていない。

「……」

この状況を前に、灰原は言葉が出なかつた。

「博士、私はずっと家にいたの……？」

状況を飲み込めて来た灰原は、改めて博士に確認する。

「勿論。哀君は今までうなされていたからの。」

博士は、優しく言い聞かせる様に話す。

（じゃあ……江戸川君が死んだのは、夢……。）

この答えは、灰原に相当な驚きを与えた。

何故なら、あの風景があまりにも生々しく、気持ち悪かつたから。コナンの、青白く変色した皮膚や、既に冷たくなつていた手……。

痩せた顔や、周りの人々の反応。

思い出すだけで、背筋に寒気が走つた。

「……私は今まで、夢を見ていたようね……。」

やがて灰原は、静かに語り始めた。

博士は黙つてその様子を見つめている。

「江戸川君が死んでしまつて……私と博士は、死に日に会えなかつた。」

灰原は夢の内容を思い出しながら、ゆっくりと博士に話す。

悲しそうな表情で、それでも話を続ける。

「そうじやつたか……、辛かつたのう。」

博士も、かなり暗い表情になつていた。

これが現実だつたらと思うと、寒気が走る。

今は黙して、警察からの連絡を待つだけだつた。

「もう九時だから、そろそろ起きるわね。」

「じゃあ、ワシは下に行つとるわ。」

灰原は、いつも通りにカーテンを開け、身支度を済ませるとすぐこ
一階へ向かつた。

そのまま何事も無く、一日が過ぎた。

結局、この日もコナンは見付からず、また無機質な一日を過ごしてしまつた。

しかし、転機が訪れたのは一日目の事である。
それは、一本の電話から始まった。

「えつ！？ コナンが…はい、分かりました！」

博士の大きな声が、家の中で反響する。

「どうしたの？ 博士！」

灰原も、博士の驚き様を前に冷静ではいられなかつた。

「警察からじや！ コナンが見付かつたと…」

博士は、驚きにも似た表情を浮かべて言う。

「何ですって！？」

待ちに待つた時は、突然に訪れた。

第八章・終焉と開闢（後書き）

…夢かよつ！…何じやこの展開は。実は作者である自分が、体験した事を元に話を進めました…こんな事つて、たまにありますよね？夢から現実に戻る時に、記憶が混乱する事！まさにそれを真似た（又はパクつたとも言える？）まあ、今更遅いしな！これっぽっちも他人のアイデアは真似してませんので、あしからず。次はどうなるか？まだ未定なんですよ。それじゃ、また次回お会いしましょう！

第九章・夢と現実の違い

電話の相手は、日暮警部の部下だつた。

冷静な声で、コナンが見付かつた事を淡々と説明している。

家の周囲からは、車の騒音や物音など、一切聞こえて来ていない。

ただ、電話の応答をする博士の声だけが、室内に響いていた。

『…と言つわけです。後は日暮警部が説明をしてくれるでしょう。

「分かりました。では今から向かいます。」

そう言つと、博士は慌ただしく電話を切つた。

一度大きな溜め息を付くと、灰原の方を向いて静かに口を開いた。

「哀君…、今から病院へ向かうぞ。」

嬉しいはずなのに、博士はどこか浮かない顔をしていた。

「博士…、何か様子が変だけど…？」

その様子を素早く察知したのか、灰原は怪訝そうな顔をして訪ねる。

「いやいや…あんまり突然の事だつたんで、驚いただけじゃよ。」

やはり、博士は何かを隠しているようだ。

普通の出来事なら、多少喜ぶはずなのに、全く感情を出していくない。

「じゃあ、ワシは準備をして来るよ。」

そう言つと、博士は一階へと上がって行つた。

まるで、灰原の追求から逃れるようだつた。

（博士…、何か隠しているのね。）

妙に慌てている博士を見て、灰原は思った。

何か言えない事実があつたのは、この時点ではほぼ確定している。

（にしても、一体何があつたのかしら…。）

家の戸締まりをしながら考えていたが、結局博士が何を隠しているかは分からなかつた。

ただ一つ言えるのは、コナンは間違ひ無く生きているという事だけ。

それは確定している。だから、希望を捨てるにはまだ早かつた。

「博士、まだ用意出来ないの？」

未だにリビングで何かを探している博士を、灰原は急かす。

「いや…、家の鍵が見付からなくて。」

引き出しの中をガサガサと探しながら、博士は困った表情で言つ。

「そんなの良いわ！早く行きましょう。」

「じゃが、また奴らが来たらどうするんじゃ？」

博士は、また組織の手が灰原に及ばないか心配していた。

「無駄よ。奴らに防犯対策はナンセンス…意味が無いわ。」

組織の手口を知っているだけあって、戸締まりが無駄だと気付いていた。

そして二人は、戸締まりをせずに外へ停めてある車に向かった。

「いや…、今日も外は暖かいのう。」

博士は、小さく背伸びをしながら言つた。

春という事もあり、外は柔らかく暖かい風が吹いている。

「ええ、たまには外に出るのも良いわね。」

太陽の日差しを手で遮りながら、灰原も一時の解放感に浸っていた。

「じゃ、行くかの。」

「ええ。」

二人は車に乗り、エンジンを掛けると、病院へ向けて出発した。暗い気分も少し晴れ、阿笠博士もさつきの様に動搖はしていない。灰原自身も、その事を咎める気は無かった。

「大体、あと五分位で着くかのう。」

車の時計を見ながら、博士は言つ。

すぐ近所にある大きな病院なので、そんなに時間はかからない。

「でも…、組織の手に落ちて助かつた事は奇跡に近いと思うわ。」

外を眺めながら、灰原はぼつりと呟く。

「そうじゃな！助かつて良かつたわい。」

博士も、嬉しそうな表情をしていた。

やがて、目的地である病院が見えてきた。

駐車場には、平日のせいか露骨に空車が目立つていて。

適当な場所に車を停めると、一人はドアを開けて車を降りた。

駐車場から病院までの道はそれほど長くないにも関わらず、二人に取つては、長い時を経て辿り着いた様な気がした。

それほど、二人の関心は入院しているコナンに向けられていた。

「すいません、江戸川コナンの病室は…。」

病院内に入り窓口に向かうと、博士は再確認の意味でもう一度訪ねる。

事前に部屋番号は教えられていたのだが、動搖していたため曖昧にしか覚えていなかつた。

「江戸川様は…、401号室になりますね。」

束になつて書類の一枚を眺めた後で、受け付け係は静かに言つた。

「えつと、401は……四階じゃな。」

エレベーターの近くにあつた案内図を見ながら、博士は独り言を呟く。

「博士、エレベーター來てるわよ?」

案内番を見る事に夢中になつてゐる博士は、エレベーターのドアが開いてゐる事に、気付いていない。

「おお、すまんすまん! 今行くよ。」

博士が急いでエレベーターへと乗り込んだ直後、ドアが閉まつた。それを見ながら、博士はギリギリセーフといった表情を浮かべている。

(やれやれ…まるで緊張感が無いんだから。)

これからコナンと対面すると言つのに、余裕すら見せる博士の落ち着き様は相当な物だと、灰原は思つた。

やがてエレベーターが止まり、四階のフロアがドアの向こう側に現れた。

廊下は、現在地を中心に左右へと分かれおり、401号室はその右側にあつた。

「ここ…江戸川君がいるのは。」

二人は今、コナンがいる病室の扉のすぐ前に立っている。

博士から見れば、何の変哲も無い普通のドアだが、小学生の灰原からすればとても大きな壁の様に感じられた。

例えるなら、自分とコナンの対面を遮る境界線の様に見えていたかもしれない。

（入りたい…。入つてすぐに会いたいけど

彼に会つたら何て言えば良いのかしら…？）

灰原は、そんな事を考えていた。

コナンがこんな目に合つたのも、全て自分の責任だと感じていたのだ。

自分さえ組織に尾行されなければ、こんな事は起こらなかつた…。

自責の念が、灰原の感情を支配していた。

しかし、そんな灰原をよそに博士はゆっくりと扉を開く。

「あつ…」

目の前の光景にはつとして、灰原は現実の世界へ引き戻された。

ギィイ、と音を立てて扉は開いて行く。

次の瞬間、一人の目に飛び込んで来たものは、酸素マスクをしながら

ベッドに身を委ねているコナンの姿だった。

第九章・夢と現実の違い（後書き）

終わった…ここまで書けるとは思わなかつた。これから暫く、小説は更新しないかもしません…読者の皆様、申し訳無いです。待つ人は、どうぞ気長に待つていて下さい。（未完になりそうです…）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1122a/>

記憶の断片

2010年10月15日20時58分発行